



☆校訓 文化の薫る学校の創造
☆学校教育目標 「こころざしを持ち 自分の道を切り拓く生徒」

令和3年8月30日 発行

「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会から学ぼう！」

残暑が厳しい中、1学期に植えたフジバカマは葉色も良くすくすくと背を伸ばしています。成長には十分な水が必要とすることで、業務員の筒井さんがビオトープの縁に植えてくださいました。もし、この調子で秋に花が咲けばアサギマダラの飛来が楽しみです。



ビオトープのフジバカマ

さて、早いもので8月7日「立秋」が過ぎました。暦の上では秋の気配が感じられる季節ということですが、実際は一年で最も暑い時期で、まさしくその酷暑の中でオリンピックが開催されました。開幕早々の卓球混合ダブルスでは、水谷隼選手と伊藤美誠選手(共に磐田市出身)の「卓球大国中国を破って金メダルを獲得」という速報がメディアを通して日本全国に駆け巡りました。それはコロナ禍の社会の暗い雰囲気をも明るくしてくれただけでなく、その後の多くの日本代表選手の活躍にも追い風となりました。大会開催の是非については賛否がありましたが、多くの選手達は、一生に一度の人生をかけた大会として、極めて純粋に挑戦することを生き甲斐とし、競技に力強く臨んでいました。その姿は、私たちに多くの感動と勇気を与えてくれました。

8月24日(火)には、パラリンピック開会式が開催されました。パラリンピック開会式テーマ「私たちに翼がある(We Have Wings)」では、盲目のピアニスト辻井伸行さんや武蔵野音大2年佐藤ひらりさんの君が代など感動的な演奏がありました。皆、障害者という枠を超えた一流の芸術家です。開会式のメインは、公募オーディションで選ばれた都内中学生13歳の和合由依さんと、さまざまな障害を持ったパフォーマーの多種多様な飛行機達の演技です。先天性の羊膜索症候群、関節拘縮症による上肢下肢の機能障害がある和合さんは、演技未経験にもかかわらずとても豊かな表情を随所に見せ好評を博しただけでなく、組織委の担当者から「和合さんは、出演後多くのキャストが駆け寄ったときに号泣し、お父さんが抱きしめていた」という美談の報道もありました。ネットでは、和合さん達の演技に胸を打たれ「始まった途端に感動した」「表現力が凄すぎる」「涙が出て止まらなかった」などの絶賛の声が次々に寄せられました。海外のメディア(英BBC)も「我々は、約18カ月間、新型コロナの影響で空港に行く機会はなかったが、国立競技場での開会式は、我々をパラ・エアポートへと運んでくれた。そこで我々は翼を1つしか持たないため飛ぶことができない「片翼の小さな飛行機(Little One-Winged Plane)」に出会った。やがて彼女は苦難から立ち直る周りの姿に影響を受け次第に気持ちが変わっていき、彼女は自ら旅立つ自信を得たのだった」と伝え、新型コロナ禍に苦しむ社会と、苦難を乗り越えようとしている人々を表現した開会式のコンセプトを絶賛したそうです。

島田第二中学校は、20数年前から障害者との共生社会を目指しています。更に民族の異なる人々が、互いの違いを認め対等な関係を築き共に生きていく多文化共生社会を加え、現在は国籍、性別、年齢にこだわらず様々な人の多様な働き方を推進していく多様性(ダイバーシティ)を求めています。「多様性と調和」をテーマにしているパラリンピックから多くのことを学び、パラリンピアンへの果敢なチャレンジや活躍をしっかりと見ていきましょう。